

韓國人日本語學習者の會話授業と

その教授學習法の考察

－ 韓國人大學生を對象とした初級日本語授業の場合 －

朴柔培*

目次

1. はじめに
 2. 日本語の會話授業とその教授學習法
 3. 初級會話授業における授業計畫と學習者特性
 4. 初級日本語會話授業における教授學習法の一實例
 5. 初級日本語會話授業の實際と戦略
 6. おわりに
-

1. はじめに

近來、韓國における日本語學習者の増加は大學においても同様であり、主に初級レベルでの需要が一番目立っているといえよう。そしてこの日本語教育においては様々な言語學や教育學関連の理論と、言語習得に関連する理論が多く含まれている。そのなかで、韓國の各大學での大學ごとの教授方法や學習目標の違いは認めるものの、共通の當面課題であり教授目標と言えるのは、短い期間により効率的にできる言語習得であろう。

そこで、本研究は、韓國の大學生である日本語學習者の初級授業において、より効率的な言語習得をさせるためには、どのような日本語教授學習の目標と方法や戦略をもとめていて、具体的にどのような授業、教授や學習方法あるいは戦略などが望ましいのかを考究する。1)

そして、今日にいたる様々な言語學や教育理論に基づいた<教育學>としての立場というよりは、實際の教育現場(授業)において、どのように實踐されているのか、またどのように具体化(實際化)されるべきかを考究する。

* 한국과학기술원 인문사회과학부 대우교수 일본어교육

1) 日本語教育學會「日本語教育事典」大修館書店 1982 p.621-632

ところで教育現象や実際の授業というのを文字化するというのはかなり複雑であることは承知しているものの、本稿は、主に実際教育現場において、もっとも複合的、総合的な教育(授業)である〈會話授業〉の考察をし、今後の韓國の實際的日本語授業の在り方や問題、課題などを、より具体的に考察することをめざす。

2. 日本語の會話授業とその教授學習法

本章では、韓國人日本語學習者の日本語習得をより効果的にできる、初級授業における有効な教授學習法とは何かを考察する。そしてまず、日本語授業において一番先に問われるべき課題として、教授者の教授學習觀について考察する。二つ目は、初級の授業においてもっとも効率的教授學習法として求められる、〈會話授業〉の在り方やその根據について考察する。三つ目は實際日本語授業において取り扱うべき學習方法やその教授法について考察する。

2.1 教授者の教授學習觀

日本語教育としての、日本語授業における教授學習法の考察は、まず第一に教授者の教授學習觀について問うべきであると思われる。

そして、ある日本語教育を担当する教授者は、授業の實際において最初にまず以下のことを考えるべきであると思われる。

- (1) 學習者のレベルの想定
- (2) 該當學習集団に相応しい教材の選擇
- (3) 實際授業における教え方

これらは、教授者によっては優先順番や段階は異なることもできよう。また、この三点は、一つの授業の不可欠な要素として考えられているといえよう。しかし、日本語教育に従事する教授者において最優先的に問われるべき課題というのは、日本語の〈何を〉どのように教えるかよりも、何を〈どうして〉教えようとしているのか、という姿勢、即ちひとつの教授學習觀であるといえよう。²⁾なぜなら、このことは教授者の、一定の期間中行われる日本語授業全体の性格を決めるからである。ひいて全体の授業目標の實踐とも關連するし、授業方式や學習方法、すなわち學習者の日本語習得や獲得に大きく關与し、將來、一人の日本語驅使者の話し方(表現力)に大きく影響を及ぼすことになるからである。

また教授者は現實的授業を行う前にまず、上記の(2)教材の選擇や(1)學習者のレベルの把握

2) H.H.Stern 「言語教授の基本概念」夏雨 1995 p.169

をしつつ、一般的学習目標というのは主に日本語駆使能力の育成におきがちであろう。が、教授者にとって実際の授業上、一番慎重に考えるべき点は、(3)実際授業上の教え方であると思われる。つまりどのような日本語教授の目標や方向を持って授業を行うかということである。しかし、従来日本語教育現場である授業においては、〈なぜ〉より〈なにを〉が優先され、教授学習法はそれほど表に深刻に問われなかったように思われる。

また上記の項目はある意味での教授者特性³⁾として、ひとつの授業の性格をきめる要素ともなろう。特に本稿のような日本語(外国語)会話授業においてはもっとも学習者の学習および言語表現力の育成に深く影響を及ぼすことになると考えられるのである。

2. 2 会話授業の位置づけ

教授者の授業目標の多くは、当然ながら学習者の日本語意思伝達能力、あるいは言語疎通能力の伸長である、ということは、基本的日本語の授業目標であることは否定できないのであろう。しかし、実際の授業における教授学習法の多くは、教材中心に行なわれている、あるいは依存している場合が多くみられるのも否定できないのであろう。それは教授者の選択として尊重されるべきことではあるが、学習者の総合的(話す・聞く・書く・読む)言語能力の育成という学習目標のためにも、また会話能力の伸長のためにも、初級の実際の授業の学習(授業)目標は会話授業を中心に立てるべきであると思われる。

会話(式)授業とは確かに教材中心ではない。そして日本語教育におけるこの会話授業というのは、多くの言語教育学の理論において随分前から取り上げられ、また強調されている〈話す聞く能力の育成〉という目標と一脈相通している。但しここでひとつ言及しておきたいのは、教材中心の授業はかならずしも日本語能力を養えないということではない。また本稿の会話授業において教材不要論でないが、会話能力の育成とは授業中の会話(学習)の実行なしには、達成できないということを強調したのである。ところで、従来授業においてこの会話授業の実践状況のなかでは、会話授業という授業計画や学習目標としての位置づけはあるものの、その具体的授業実践の報告や教授学習方法の研究及びその提示は多くなかったように思われる。そこで本研究はこの会話(式)授業において、どのような教授学習法が望ましいのか、即ちいかなる会話授業によって日本語の会話能力及びその総合的言語能力の育成ができ、より効果的に日本語の言語習得・獲得のものできるのかを考究する。

3) H.H.Stern 「言語教授の基本概念」夏雨 1995 p.528

2.3 會話授業における教授學習法

韓國人大學生の日本語學習のために行っている初級の日本語授業での第一の授業及び學習目標というのは、日本語の驅使能力であり、あと作文力や讀解力となっている場合が多い。また初級段階での日本語能力としては、會話能力の比重は大きい⁴⁾、ひいてこの會話授業による音聲言語習得は初級日本語學習者の場合、もっとその意義があるといえよう。そして會話授業における、作文力というのは會話能力の伸長(育成)の延長線上にある、あるいは平行線として考えるべきであると思われる。もう一つの讀解力の場合も初級段階では、ひらがなの習得を第一とし、ひらがなでできた文章の讀みができる程度の學習目標が望ましいと思われる。

そして日本語習得學習のための授業のなかで、言語習得をより効果的にできる會話授業における教授學習法を考察すると以下のような項目を挙げることができる。

(1) 母語の習得における認知過程を踏ませる、系統的認知學習

人間の母語習得における一連の過程⁵⁾は、本稿の日本語の會話授業の根據であり、第一の教授學習法として挙げられる。そして日本語習得に役立つ母語習得の過程はまず文字學習や國家レベルの國語教育が始まる以前と限定して、5・6年の間よく使われている言葉を、日本語の初級の授業において応用するのである。その根據は、外國語の習得と母語の習得とは異なる点もあるが共通の点も少なくないからである。⁶⁾ここで日本語學習に応用できるその共通点をみると單文中心の言葉使いと分化されていない言葉使いがある。この二つは初級の日本語學習者にもっとも必要な事項であり、ぜひ認知學習させるべきであると思われる共通点である。また母語の習得も外國語の習得というもの(外國語の習得の場合は大概人間の言語認知の後に行われる場合が多いもの)簡単な言葉使いから分化して系統的に延びていくからである。⁷⁾

(2) 先に音聲で覚える、文字習得以前の會話授業による經驗學習

現在韓國の日本語教材における目次の始めは、文字言語の習得のための平仮名關連が多い。この目次にしたがってその授業も必ずしも一致して行われているとは言えないものの、やはり實際授業の多くの順序は教材の目次に依存して行われているのも否定できないのであろう。しかし本稿の會話授業においては、従來の日本語教材はそのまま使うとしても實際の授業の始めの何時間は、必ず音聲言語による日本語會話授業を進める。時間の目安は最終的には各授業の總授業時數と學習者集團のことを考慮した教授者の綜合的判斷によろうが、大抵3週目前

4) 遠藤織枝 編「概説日本語教育」三修社 1995 p.57

5) 박경자·강복남·장복명 공저「言語教授學」博英社 1994 p.209

6) 小山悟·大友可能子·野原美和子 編「言語と教育」くろしお出版 2004 p.334

7) 趙明翰「言語心理學」民音社 1995 p.242-262

後の授業の時から文字(平仮名)言語の学習を進めるようにする。それは二週間程度の日本語の音聲言語のみの経験のためである。

またこれは音聲で始めて音聲で覚えていくという教授学習法であり、文字言語以前の音聲言語の学習⁸⁾だけではなく、各授業において続けて行う教授法として、會話授業のなかでもっとも大事な項目である。またこれは他の外国語の教授学習法においても同じく、音聲言語との体験の前に文字言語に漏出されるのは、あえて長期的該當言語の習得の阻害になることも少なくないからである。但し會話中心の授業であっても言葉使いの説明や意味は母語(韓国語)で行い、音聲言語のみの学習量は多くないようにする。それは教授学習方法として大事なものは、多くの言葉伝達の知識よりは最小限の言葉による意志伝達能力の育成であるからである。⁹⁾

(3) 普通体の言葉を積極的に取り入れた、會話授業

日本語習得をめざす韓国人学習者の学習目標は当然ながら日本人との會話ができることであろう。そして日本人の言語生活のなかで多く使われているのは普通体の言葉であるが、従來の韓国の日本語の學習教材においては多くみられないし、日本人の言語生活における比重ほど學習されてないと言えよう。最近日本語の普通体の言葉を多く取り入れた日本語の學習教材もいくつかは考察されるが、中級以上の教材用のほうが多い。しかし本稿では普通体の言葉は初級の段階でより積極的に學習させるべきであると思われる。この會話授業として、授業の初期に學習させる普通体の言葉とは、日本人の幼児の母語習得段階においてよく使われている言葉を意味する。

韓國の初級の日本語授業の初めに行われている學習内容の多くは文字習得であり、その教材の多くの語彙は名詞類であるが、形容詞や動詞の基本形のほうも文字習得時の語彙のなかに取り入れるべきであると思われる。しかし初級の日本語授業においては普通体の言葉使いやその學習は多くみられないし、只、文字習得のあとに行われている名詞文や形容詞文、動詞文等の學習の際に、單語の基本形として提示されるのである。そしてこの普通体の言葉を學ぶという教授學習は、従來の授業や教材においてまだ何らかの抵抗がある。その理由の一つは、會話言葉として最初に丁寧語を學ばせるためであるということは認めるものの、最近の現代日本語の変化や學習者である大學生の言語生活との関係のためにも、また現代日本人の日常的言語社會を理解できる道具としての日本語學習目標のためにも、その必要性は迫っているといえる。なによりこの普通体による會話授業というのは、教授者と學習者との親密感をもたらす言語機能もあるし、韓国人の日本語學習の効果をあげられるはずであるからである。

8) Richards & Rodger s「言語教授方法論」螢雪出版社 1995 p.176

9) 朴庚洙「外國語授業論」螢雪出版社 1995 p.70-72

(4) 文法より先に直接に話せる、日本語文章による会話授業

本稿の会話中心の授業による日本語学習方法とは、毎回の授業の最初は、文法の教授や学習のまえに必ず会話文章を体験させることである。つまり、まず音聲で覚えて理解し、そのあと、その文章と関連する文法を説明するのである。これが可能なのは本稿のような初級日本語学習の場合は単文中心の会話文章を30か50までと限定して行うからである。具体的にみると授業の初期に覚えたり学習する内容は、日本人の幼児期や日常生活中によく使われている言葉使いを中心に、ピラミッド建築のような反復授業を行うからである。

(5) 日本の言語文化と社会性を含む認知学習によって促す、会話表現活動

一つの言語はその社会の文化と歴史をも含んでいる。特に本稿のような会話授業では文化や社会性の意味のある会話文章を選定するようにしている。ここでは兩國共通の言語表現にも注意をはらいつつ、言葉使いのなかで誤解を招きやすい文章表現にも着目して学習させるのである。例えば韓国人は日本人ほど「{お願いします}」や「{すみません}」と「{失礼します}」という言葉を反復的に使わないし、表現も違って直接的指示内容の言葉をよく使うのである。また形容詞の場合日本語の「{恥ずかしい}」や色表現「{赤い}」は韓国語においてはその意味表現が五倍以上もある。このような兩國の単語の意味違いや使い方と表現の違いを正確に認知させて学習させる方法である。それは韓国人学習者に日本語に対する理解や関心と好奇心等の刺激になって学習を促すということである。

(6) 既成知識や親身な言葉の活用による、会話授業

韓国語と日本語を比較した場合、漢語のみではなく和語(固有語)での共通単語や類似単語が多くある。いっぱい、とか馬鹿、のような言葉は歴史的な影響であるが、兩國の固有語のなかでは群れや町とか、のぼのぼやぶりぶりなどがある。このような兩國の単語を比較しながら単語認知学習を行うのは、本稿のような会話中心の授業においては文章作りの時に効果的であるし、すぐ学習者の日本語会話にも繋がり¹⁰⁾、長期的記憶の学習にも繋がる。それは初級日本語学習者が授業後期につれて増えていく学習量の負担を軽くする効果も期待できるのである。このような兩國の類似語は、韓国人学習者には正式な学習によるものではないが、よく知っている日本語はいくつかあろう。そのなかには意味の知らない言葉や間違った意味の単語もあろう。しかし学習に関心を持たせたり楽しくできる話題として、またはそれぞれの意味単語や文章作りとして会話学習のときに大いに活用すべきであると思われる。これらはある意味では兩國それぞれの言葉の性質の勉強となり、また言語の普遍的性質を学ぶことであり、韓国人大學生の外国語教育の一つの意義になろう。

10) JACET SLA 研究会「SLA研究と外国語教育」リーベル出版 2001 p.82

(7) 教授者と学習者との直接的コミュニケーション学習

本稿のような會話授業における大事な教授學習法の一つは、教授者と学習者との関係を、教える側と学ぶ側とする、のではなく、互いに實際的會話をするような授業作りにあると言える。そのためには會話文章の中身は、學習者自らの自分自身の話しとして發話させることである。またこのような學習者の發言(會話)を引き出すためには教授者は教材に頼る發問ではなく、學習者の情報をも取り入れる必要がある。11)

(8) 教授者の經驗的會話表現と、學習者の韓國的文化受容の表現力育成

本稿のような會話式授業においても教材は要るが、會話授業の参考あるいは基本とし、教授者は教材の内容のみに止まらないで授業担当時期の學習者集団の生活言語をも視野に入れ、韓國的言語表現を生かした初級日本語文章を會話授業に取り入れることも可能である。そのためには學習者に教授者の日本語學習時の實質的經驗的言語表現文章を提示したり、表現したりする會話授業を作らなければならない。そうすると學習者は日本語を学ぶよりは日本語で話す授業となり、より認知的日本語學習ができるのである。

以上は、今日に至る様々な日本語教育の實踐である授業において、従来、この會話授業の重要性は認知されてはいるものの、より實際的教育(授業)現場におけるより具体的實踐の方法論について考察したものである。次は學習者特性のような學習者集団や教材の研究について、特に教授する側による學習への影響をも考察する。その次に會話授業における教授學習の具体的實踐方法について考察する。

3. 初級會話授業における授業計畫と學習者特性

3.1 初級會話授業における學習目標と授業計畫

まず日本語の初級會話授業における學習目標は以下のように定めることができる。

- (1) 主な學習目標は、(初級の場合なので)日本での日常生活ができる程度の會話力と言語能力を養う、ということとする。
- (2) もう一つの目標は、日本人の言語生活や文化、社會などへの關心と理解を深める、ということとする。

ここで、日本での(または日本人との)日常生活での言語とはなにか、どれだけの語彙で、どんな文章を?、といった教授と學習の課題が出る。また、各クラス(學習集団)にきめられている

11) 朴庚洙「外國語教育論」螢雪出版社 1995 p.131-135

時間の差もあろう。しかし本稿は韓国の大學での大學生を對象としているので、授業計画として最低、一學期の15週にかけて毎週2時間か3時間を想定する。そして最低30時間から50時間以内でできる授業計画のうえで、なにをどう教えるか、何がどのように教えられるのか、などについて考究する。(これらの具体的教授・學習の内容については、實際授業の研究の段階において提示し、考察する。)

3. 2 學習者特性

授業というのは、少なくとも、教授者と學習者と學習内容(教材を含む)によって成立する。そのため、教授者の授業目標や戦略と、第二章での教授者特性や學習内容なども大事であるが、授業を受ける(というよりは學習を行う)學習者の特性こそ、一つの授業成立の成功(!)の鍵になるといえる。特に本稿のような日本語會話授業においてはもっとも必要な事項として位置づけたい。そのためにも實際的日本語授業における最初の作業となる。ひいて、これは、教授者にとっては、ある意味での授業成立の要件であり、その終了までにも必須である。會話授業の最後まで調律していくべきであろう。

ここで、教授者によって(授業目標や戦略の選擇として)は若干の違いはあるものの、學習者特性としての基本項目は以下のように挙げることができる。これらは單なる學習者の特性としての情報でなく、日本語學習内容のひとつになるのでその項目を簡単に付け加えておくと以下の通りである。12)(より詳しくて多様な會話文章としての、實際授業での使い方は第4章の考察の時にする。)

- (1) 名前、専攻、仕事：何ですか。
- (2) 故郷(家)、大學：どこですか。 なにか有名ですか
- (3) 趣味、特技：何ですか。 好きですか。 上手ですか。
- (4) 知っている日本語(複數・副詞)：知っていますか。
(初級の語彙として相応しいものを選んで使う、認知學習の一つ・第二章)
- (5) 日本語の経歴
：主知の學習内容としての想起や再認識と修正のためである。
- (6) 日本について關心のある分野
：何に關心がありますか。好きですか。ありますか。どうですか。
<*好きこそ上手なれ。(諺も學習の激勵として使う)>
- (7) なぜ日本語を習うのか、という動機や目的を聞く
：認知學習法やスキマの活用及び關連性による認知學習のためである。

12) 日本語教育學會 編「タスク日本語教育法」凡人社 1995 p.12-14

(8) この授業について望むこと

： 学習者と教授者との距離をなくし、親近感のある自然な会話雰囲気作りとなる。

(9) 日本人に聞きたいことなど(教材の学習内容と関係すること)

以上は、最初の授業において把握(アンケートで書かせること)しておき、授業中の実際の日本語会話の際に実感をもって使っていくもの(会話の材料である話題の一つとして)である。

4. 初級日本語会話授業における教授学習法の一实例

ここでは実際会話式日本語授業とはどのように行なわれているものかを考察する。

(1) 音聲言語で学ぶ

会話式授業において一番基本的教授学習方法とは、やはり最初から<音聲(日本語)>を聞いて<(日本語で)話す(真似する)>ということである。そのためになくとも1週間目と2週間までは鉛筆を使わず、メモなどもしないようにし、多くない日本語の会話文章を覚えさせる方法である。

一回の会話文章は約3-5文章程度とする。このような授業方式は学習者たちにとっては初めての経験(学習方法)であろうが、学習者たちが自ら一週間の記憶力を試すように促す。またこれは、3、4、5、時間までの学習の量的問題ではなく、一週間か2週間の間隔をおくということが大事である。できれば文字(ひらがな)の学習は3週間目のほうが理想的であると思われる。学習者集団によっては焦る場合もあろうが、しかし最低一週間か2週間以上の時間距離をおくのは会話式授業に入門する最初の関門である。また音聲で覚え(記憶)ていく訓練の一つであるし、人間の言葉の習得が最初音聲言語である、のと同じ認知活動を用いる教授学習法である。つまり、文字認知(視覚)より先に日本語の音の感覚(による言語認知)を身につけさせる方法である。

(2) 日本語会話を促す(発問)

会話式の最初の授業の場合、教授者自信の簡単な紹介と、学習者から日本や日本語に興味をもてるようなことなどの話をする。それから会話式の授業であることの告知をした後は、実際にどのような会話式の授業を行うのかを説明する。その実際授業事例の一つを提示すると以下の通りである。

①教授者はまず、学習者に数多くの日本語の中で一つだけ、重要な文章とはなにか、を考えさせいわせる。②その言語表現の状況とは、<明日急に日本に行くので>とか、<言葉をひとつしか覚えない能力の人だからとしたら>とか、という話しも付け加える。③そして何かの答えを

真剣に考えさせるようにする。④教授者は何人かの学習者の答えを実際に一つ一つ丁寧に聞いてOXであるかどうかを答える。⑤多くの答えは挨拶のことばとなろう。しかし挨拶というのは非言語であるお辞儀や笑顔などのジェスチャーで十分だから答えではない、ということの説明する。⑥それよりはもっと聲で表現する大事なことば・文章とは何かを考えさせる。

以上のことは、学習者一人ひとりが自ら授業に参加し自ら学ぶ、あるいは学習者自分自身の表現(言語)で言語力を身につけていくという認識を持たせるためである。日本語で話す・表現するというのは、受動的に學んで行くのではなく、その(日本語表現)まえに、まず先に自分で母語でなにを言いたいのか、表現したいのかを考えるようにし、また自ら何を話しているのかを十分に認識しながら學習するという認知學習のためである。

(3) 多様な場面で使える言語使用能力の育成

上記の答えは、〈お願いします〉である。これはこれから學ぶ〈實際の言語〉というのは、先に發話者の話(表現)とそれを聞く受信者の間に存在するものである、ことを理解させることである。つまり、發話者は受信者に何かの要求や意思をいう。これと同様に、外國語を習うときの學習者はまず相手(受信者)に何かの意思伝達をすべきであり、それに当たる重要な最初のことばとは、〈おねがいます〉ということを學習者に十分認知させる。

それから會話式の授業においてもっとも大事なものは具体的かつより多くの事例(用例)の提示である。上記の〈お願いします〉という言葉の使われる實例をいくつか挙げると、〈最初の挨拶の時:これからよろしくおねがいます〉、〈電話の時:佐藤さんおねがいます〉、〈食堂で:うどんおねがいます〉、〈映畫館で:となりのトトロ、二枚おねがいます〉、〈勘定の時:カードでおねがいます〉、〈タクシー:驛までおねがいます〉、などがある。教授者は、ある意味でこの言葉とは日常生活の殆どの場所で使われているとも言えるほどである、ということを學習者に説明し、どのような場面で使えるかを十分認知させ表現させる。

(4) 認知的會話表現力の育成

以上の教授學習法は、従來の最初の授業の際に行なわれている、多くの單語(主に名詞)の習得や文字書きの練習より、より日本人の生活言語(會話)を學ぶことができるのである。つまり各學習者は、かなりの時間が経つにつれる言語知識の蓄積による言語力や多くの記憶力の向上ではなく、一つの會話言葉をもちいて、多様な場面において最初の日からすぐ日本語で(母語のように)話せる、かつ多様に、かつ具体的に、かつ實際的に話す、という経験や言語認知學習ができるのである。またこの〈おねがいます〉ということばは、初級レベルの後半の表現文型學習のひとつである〈て形〉のなかの、「て下さい」と關連つけることもできる。また「て下さい」という表現(言語)は韓國的直接的表現のひとつであり、韓國人の日常生活のなかでは〈おねがいます〉という表現は日本ほど使われていない、ということもあるが、眞面な日本

語を習うためにも、その違いをちゃんと認知させる必要もあり、学習者はより意識的に覚えるようにする必要がある。このような教授学習は日本語と韓国語との正確な比較による実際の発話ができる認知学習となる。13)

(5) 多様な表現力の育成

次は、上記の単文である〈お願いします〉という言語表現(会話)につけて、もっとも韓國的言語文化の表わしともいえる、〈はやく〉とか、韓国語のなかに入っている日本語のひとつである〈いっぱい〉などを入れた表現なども、日本語学習の言語認知として有効であると言えよう。

最初の授業の時間は、学習者の人数や時間における限りはあるものの、上記のような授業と学習目標の達成を、一回の授業内容や戦略とすると、教授者は十分に文字なしの会話式の授業ができるはずであろう。

また、このようにひとつの重要な会話文章(授業状況によっては3から5の)を、各(毎週)授業時のメインにしておくとして学習者たちはそれほど音聲言語のみの言語(会話)力の認知学習への抵抗はなくなるのであろう。

5. 初級日本語会話授業の実際と戦略

初級の日本語学習のために行う会話授業において、より効果的教授学習法の実際と戦略とはなにかを探ると以下のようなことが考察できる。

(1) 単語水準の学習より会話文章の習得とその表現力の育成

日本語教育における基本語彙については、その数と具体的単語が示されている、いくつかの仮説がある。大学の一学期中に行われる日本語授業の場合も同様であろうが、会話式授業においては、どのぐらいのどの単語の学習が必要であるのか、というよりは、どのような会話文章をどのぐらい教えられるか、が問われるべきであると思われる。(ここで大学の日本語教育での基本語彙や単語というのは各大学の教材や学習集団による選択となろう。)

またある社会の基本語彙というのは、単語で示すと約2000ぐらいの単語がよく言われている反面、文章の場合は200前後とも言われている。そこで日本語教育における大学での基本本文を選ぶ基準とは、最初の授業目標に沿って日常生活のなかでもっとも多く使われているものという頻度によるのを挙げることができよう。大学の初級での最低の基本文章の数は約30-50程度ものが適切であり、実は人間の生活のなかでもっともよく使われている言葉を考究した。

13) 朴庚洙「外国語教授論」螢雪出版社 1995 p.127-129

また、その文章の言語認知においては大學水準に沿った認知學習を目指すべきであろうが、その認知學習の一つは、學習者の言語(母語)生活においてどのように使われているのかを認知する方法や、長い英語教育において獲得した頻繁な英語會話文章と関連つけて、理解させたり、事例をもって説明したりする方法があろう。

(2) 日本語學習においてもっとも重要な會話文章を中心とした會話授業戦略

初級の日本語學習における最低の會話文章については、まず單文中心の會話文章と、疑問詞の入った疑問文の活用文章の二つに分けて、考察することができる。

まず第一に、初級の日本語學習においてもっとも基本となる單文會話文章をしめすと以下のとおりである。

一は**{お願いします。}**がある。これは第4章においていくつかの具体例を持って説明しているものの、もう少しその實際的文章使いと授業時の使い方の例をみると、最初の學習者同士、あるいは先生との挨拶のときに一人ひとりの學習者みんなに言わせる。そうすると學習者たちは何回も反復して聞いているうちに自然に覚えらる。またこのお願いしますという言葉と一緒に使える目的語としては、お茶・コーヒー・プリント・コピー・連絡・電話・準備・掃除等があり、副詞は、はやく・いっぱい・これから(いまから)等がある。後にこの言葉が十分認知されると次の**{あります}**や**{できます}**と一緒に使うこともできる。

二は**{ありますか}**がある。これはだれかに聲をかけるときや話の前に相手に許しをえるという言葉使いができるし、實用會話文章としては、(いま)時間ありますか・ドライライセンスがありますか・日本語に自信があります・よん様は人気があります・日本は温泉がいっぱいあります・車がありますか・韓國の酒はなにがありますか・約束が/熱があります、等を擧げることができる。

三は**{ほしいです}**がある。これは子供の時や親しい人達の間に使やすい言葉であり、實用文章をみると、(いま)なにがほしいですか・時間が一番ほしいです・車が/友だちが/パソコンが/ドライライセンスが・ほしいです等がある。

四は**{好きです}**がある。これは人間のコミュニケーションの言葉のなかで一番有効なものであり、何かの要求や關心を示すときにも使うことができる。實際會話文章の例を擧げると、(料理は/スポーツは/數字は/花は/酒は)なにが好きですかと歌手はだれが好きですか・仕事は好きですか等であり、疑問詞の場合は除いて使ってもいいと思われる。

五は**{大丈夫ですか}**がある。これは韓國や英語においても一番よく使われている言葉の一つであり、今/あしたは/時間/いまのコンディション(調子)は/試験は/準備は大丈夫ですかなどの使い方がる。

六は**{どうですか}**がある。これは二つの會話機能がある。一つは形容詞で答えるような會話文章の使い方ともう一つは勧誘の意味を含む文章である。前者はいまの氣持ちは/日本語は/日

本語の先生は/韓國のレストランは/キムチの味はどうか、があり、後者は、ドライブ、ご飯、お茶、映畫、明日の約束はどうか等がある。またこれは五の{大丈夫ですか}や二の{ありますか}と四の{好きですか}を付け加えて會話練習をすると、より確實な認知學習ができよう。

七は{**できますか**}がある。これは四の{好きです}と一緒に學習者の能力のような個人趣向や情報交換の會話文章としての意義があり、日本語/英語/料理/お酒/運轉(ドライブ)/治療/ピアノ/水泳/朝ご飯/約束/何時に/明日まで準備ができますか、という文章として學ぶことができる。

八は{**要りません(要りますか)**}がある。たとえば、なにもいりませんのような拒絶のときに有効な表現であり、後はなにかいりますか・印鑑がいります、等がある。

九は{**知っていますか**}がある。これは知識・情報の交換や伝達に有効な會話文章であり、たとえば日本語・日本語の先生・タイトルを知っていますか、として使える。但し文型としては少々単純でないので學習としては多少覺えにくい。

十は{**だめです**}がある。これは八の{要りません}とともに否定や禁止の表現であり、親しい仲間同士でよく使われる。そのため後にはもっと公的丁寧な表現である{いけません}と連携して學習させるようにする。實例を挙げると、それは/遅刻は/詐欺は/賄賂は/すりは/飲みすぎはだめです、である。

以上、上記の文章は、簡単な一つの文章であるが實際の様々な言語状況や場面において多様に使えるので、初級の學習者にとっては、授業の初めからすぐ日本語の會話表現ができる、有効で効率的な學習方法であるといえるのである。

二番目に、日本人の日常言語生活において頻繁に使われているし、欠かせない言葉使いの一つは疑問詞の入った疑問文であり、上記の單文會話文章と連携して學習させると、より有効な會話文章の學習となろう。さきに基本的疑問詞をみると、**何時、どこ、誰、何、どう、なぜ、いくつ、いくら**がある。ここで{**いくつ**}はとしをきくときの會話文章としてと、色々のものの数え方として、數字の覺えが終わったあとの授業の時に使うのが望ましいと思われる。{**いくら**}は買い物の時と相手のものの値段が知りたいときや副詞としての使い方があるので、それに關連する授業時に使うようにする。{**なぜ**}は{**どうして**}や{**何で**}という言葉があるので、教授者はこれらの正確な意味や使い方の違いを學習者に十分認知させる必要があるし、日常會話でよく使われているのは{**なぜ**}よりは、{**どうして**}と{**なんで**}である。そのために、この三つの疑問詞に關する説明はするものの、實際の授業時は{**どうして**}か{**なんで**}のなかで一つを選んで統一して使うのがより効率的學習となろう。またこれは會話授業の話し合いのなかで、互いの話を交わしたり聞き合う時に有効であるのもっとも反復して學習できる疑問詞である。{**どう**}は疑問詞ではあるが、日常の言葉使いのなかで上記の單文文章としての意味が大きくて先に覺えさせたので、ここでは省略する。そして上記の單文學習(10)と並行して學習できるし、疑問

詞の入った会話文章として、早期の実際の授業時に有効に学習できる疑問文は以下の四つである。

一は{どこですか}である。応用会話文章の例をあげると、いえ(おうち/お宅)や大學と仕事場、療、研究室(部屋)、教室等があり、一番最初にお互いの情報交換のひとつとして使えると有効な会話文章である。

二は{何ですか}であり、(ご)趣味/(お)仕事/専攻/特技/名前等の主語を使って話すと、最初の授業時の情報を話し合うときに有効な単文文章である。上記の単文会話文章(十)のなかで一から五の間の授業時に一緒に使うと、日本語授業の多様な言語認知学習の活動になろう。あとは、要点は/意味は/価値観は何ですかのように、疑問文のなかでは一番使い方が多い文章である。

三は{何時ですか}であり、授業中、教授者は時々本當の時間をきくようなかたちで、今何時?とか、(他科目)試験(テスト)はいつですか?として学習させると効果的であろう。また実用会話の例文はコンサートは・約束はいつですか、等がある。

四は{だれですか}であり、最初は(日本語の・ある科目の)先生は・ボスはだれですかという文章で学習し、後半の授業になると好きな音楽は・好きな歌手はだれですか、という文章として教えることができる。

(3) 単語の習得や核心文章の獲得のための品詞別重要単語による会話文章の選別

まず、前述の基本会話文章の言語認知とともに、形容動詞や形容詞、動詞の基本語彙の習得は、3週間目からの文字学習の時に取り入れるようにする。そのときはやはり母語の習得時と同様に、普通体の会話をしながら認知させる。もう一つの方法は授業の半ば頃から台頭する各品詞の学習單元になったとき、学習たちとともに実際言語生活で有効であり、頻度の高くなる単語を中心に、また意味的にも価値のある言葉を選んで、学習者の納得と理解を前提に學んでいく方法が考えられる。ここで教授者は学習者のスキマや関連性に基づく認知学習として導くようにする。またこの単語選別の場合、客觀的情報としての単語からはじめ、主觀的言語や情意的特性のある単語と隠喩を含んだ、多様な言語認知による単語や文章の選別が大事となろう。

授業の流れの中で中間テストの時は、上記の基本・核心単語と文章に沿ってできるだけ書き取りの方法が望ましいと考えられる。

(4) 文字言語の學習

文字の習得時は先にひらがなを學ばせ、漢字とカタカナは、ある程度ひらがなの定着後のほうが望ましいと思われる。しかし、會話式の授業においてカタカナと漢語はもっとも有効な言語認知の對象(資料)であるので十分活用すべきであると言えよう。

(5) 作文力の育成

作文力というのは、実は最初の会話式の授業の中で、たとえ単文中心ではあるものの、多様で正確な会話力がある場合、もっとも獲得しやすいと言える。そして形容動詞や形容詞の文法や文型¹⁴⁾を学んだ後の時期に、レポートとして連携すると、より効果的総合学習にもなる。

(6) 会話式授業における文法学習

会話式授業における文法学習は、前もって行われた基本会話文章の分析的解釈や母語の文法との違い等を取り入れて行くと、読解はできても一言のことは(会話)もできない、という学習認知状況は避けられよう。ひいて動詞の場合は日本語学習の中でももっとも困難な認知の状況に陥りやすいということに注意が要求される。そのためにこの動詞文型や文法学習の場合、教授者は、時間割りや学習者の認知状況(複雑な言語認知力)をみながら、より具体的行動や学習者の経験、スキマの活用等の教授法を取り入れる注意が必要となる。

(7) 会話授業作り

最後に、教授者は授業中の日本語会話の表現力伸張のために、より楽しくて(時には韓國的隱語的表現を日本語で表わしたり)、具体的で(時には非言語の日本人的行爲も教えつつ)、多様な言語認知状況の提示や理解、またはそのような状況をつくる努力をすべきであろう。単に多く聞いて(日本語で)話すというよりは、学習者一人ひとりが自分自信に相応しい日本語表現の力をつけるように気配りをするところこそ、日本語のもつ文化性や社会性をも自然に教えていくことになると言えよう。

6. おわりに

数多くある日本語教育関連の理論のなかで、今回の研究では、実際の日本語教育においては、一つの理論に基づく授業よりは、より洗練された多様な会話文章による授業づくりと、より認知学習的に行う教授学習法と、スキマの活用やより関連性のある授業作りによる会話授業を目指すことと、ひいて学習者一人ひとりの経験を生かして表現力をつけさせるようなことなどが、いかに大事であるかということの理解ができた。

今後はより多様な授業の事例や学習戦略の考察を深めていきたい。すなわち、初級・中級・高級のそれぞれの段階における会話学習項目や学習戦略と、読む・書くことと連携した会話力の育成と、それ以外にもより効果的に会話力を伸張させる視聽資料の活用などである。

14) 清水義昭「概説日本語学・日本語教育」おうふう 2002 p.40-41

以上、より効果的な学習のできる成功的授業のためにはあらゆる理論を求めていくということではなく、より具体的授業の事例とその検討を行うことであると思われる。そのなかでもやはり一番大事なのは基本的に教授者と学習者との共感の形成、あるいは交感であろう。教授者は教えるよりは、日本語で対話(會話)するという気持ち(態度)をもち、楽しい授業の成立をもとめていくべきであろう。

【参考文献】

- ・ 박경자· 강복남· 장복명 공저(1994) 『言語教授學』博英社 p.209
- ・ 朴庚洙 (1995) 『外國語教授論』螢雪出版社 p.127-129、p.131-135、p.176
- ・ 趙明翰(1995) 『言語心理學』民音社 p.242-262
- ・ 遠藤織柄 編(1995) 『概説日本語教育』三修社 p.57
- ・ 小山悟・大友可能子・野原美和子(2004) 『言語と教育』くろしお出版 p.334
- ・ JECET SLA研究會(2001) 『SLA研究と外國語教育』リーベル出版 p.82
- ・ 日本語教育學會(1982) 『日本語教育事典』大修館書店 p.621-632
- ・ 日本語教育學會(1995) 『タスク日本語教授法』凡人社 p.12-14
- ・ H.H.Stem(1995) 『言語教授の基本概念』夏雨 p.169、p.528
- ・ Richards & Rodgers(1994) 『言語教授方法論』螢雪出版社 p.70-72

要 旨

本研究は韓國の實際の日本語授業における教授學習法の考察である。特に大學の日本語學習者に、より効果的に基本會話能力の習得を促す學習法やその教授法についての考察をしている。

具体的にみると、まず日本語學習者に求められる基本會話の習得にもっとも有効な教授學習法としての會話授業について考察している。そしてその具体的授業における教授學習方法とは、まず母語の言語習得における言語認知過程を踏ませる系統的認知學習と、文字言語習得の前に行う音聲言語經驗學習と、日常會話としての普通体をより積極的に取り入れた學習と、文法よりは會話文章に重点をおいた實際會話授業などを舉げている。

二番目に考察しているのは、實際基本會話習得にもっとも有効な具体的授業内容としての學習目標と學習内容について考察している。まず學習者の特性の場合、單純な學習者情報としてではなく、授業の最初から最後まで十分生かしていくべき學習内容として位置づけるようにしている。これは學習者の積極的學習意欲の誘發と繋がるし、學習者の基本會話能力の伸長に効果的に働く認知學習として、また會話授業の成功の鍵として位置づけている。次は單語や文章の習得において、從來の教材・文法中心の授業を指摘しつつ、學習者自らの適切な單語の選擇やその文章作り能力の育成をも促す認知會話學習の實行授業について考察している。

キーワード：基本會話・言語習得・會話授業・學習者特性・認知學習・經驗學習・系統學習

투 고 : 2005. 8. 31
1차 심사 : 2005. 9. 10
2차 심사 : 2005. 10. 1

住 所 : (302-740) 대전시 서구 만년동 초원APT 107-908
電 話 : 011-467-5923
e-mail : pargyb@hanmail.net